

ました。何しろ地理学のベースですから。差当り私の気候学なども従前の隔年講義を改めて毎年とし、試験も年一回行います。少し手数がかかりますが最も基礎的な学科ですからやむをえないでしょう。必務の日本地誌も毎年講義します。必務は厳しくせよとの渡辺主任の厳命ですから、この試験も今から頭痛のたねです。翌年度に再試験などということが、なければよいと願っています。よき時代に卒業された諸姉に、右お便り申し上げます。



仔猫のねごと

浅海重夫

十年ほど前に男子ばかりの旧制大学を出た私の目に、いまのこの大学の学生気分について、自分の頃とは違ふいくつかの点が印象づけられる。旧制と新制との得失比較に関しては、すでに耳立たぬしい位議論されているからここではくり返さない。新制度に浴せられる非難の大部分は、学生自身に責を求められない種々のものであるが、そうした制度や時代の凡庸の影響のもとに形づくられてゆく気分傾向に、いくらか気がかりなものがあるので、これだけを指摘したい。

中学、高校と受験準備生活をつゞけて大学に到着くと、ごく少数の者は世の中の矛盾や社会の体制に深刻な関心をもち、いろいろと考えるようになる。しかし他の大多数の人は殆ど全くそういうことに無関心であるらしい。この傾向は昔も似たようなものであったが、旧制の時代には高等学校のときに大抵の者が「考える」時期をもった。それで或る者は大学に入る頃にはその時期を卒業してしまい、又少数の者は深刻に真剣にその道の研究に専らしたのであろう。私はいまの大学生活においても「考える」ことはできると思う。専門学科を学びながら深刻にならずに、皇太子の結婚とジャーナリズムの喧嘩を、コミュニストとそのシンパのみの批判にまかせて無関心ですますような一般大衆なみに、大学の学生が「考えなし」でも困るが、日教組の動向に感応作用を示すような没入のしかたでは、せつかくの大学入学の意味が失われてしまう。

共同生活に関する常識にいさゝか欠けた面が見うけられるのも、近頃の学生の気がかりな傾向である。私たちが大学に入学して前期生として学生室

を与えられたとき、まずつとめて部屋をきれいにしようと考えた、書棚や標本棚などはいつも整頓する。図書室に入ると蒸暗いせいもあったが神聖な気分さえ起きたのを覚えている。当時の主任の教授が清潔好きでやかましい辻村先生だった為もある、しかしこの地理学教室にも松井先生と云う潔癖家が坐しますのに、学生控室のたゞずまいは全くどうかと思われる。また、教室から借り出したものは、期限までに、期限がなくてもなるべく速かに返却するのは常識である。僅かしかない器具、一冊しかない本を貸出す場合、制限を設ける理由は極めて簡単である。共同社会において他人もそれを使うからである。当然の常識なので各自の自制にまっていたところ、不便を生ずる事態があつて止むを得ず貸出規則を設けるに到つたいきさつもある。共同社会で規則とは官僚主義の下におしつけられるべきものでなく、デモクラシーの下に我々自身が設けるものである。きびしい規則が必要な社会ほど、各自のデモクラティックな素養が低いことを示している。

次に旧制と新制の違いというより女性と男性の違いに原因していることで、学習態度の問題がある。十年前と云えば共学の習慣がまだ始まったばかりの頃で、旧制の女子学生の気風は殆ど知らない。男子だけを対象とした旧制の職業教育機関の学生が、私たちの知っている昔の学生である。さてこの女子大学にあつても、その重要な目的の一つは職業教育にあるという。しかし学生の入学の動機は、人によってかなり多岐であるらしい。男は成人後の職業を得るため、又より有利な社会進出のために大学を志し、卒業後は生涯の定職を真剣に探し求める。好きな学科を迷ひ、時には適当になまける自由はあるけれども、就職を放棄することは社会のしくみの上から殆ど絶対にゆるされない。女性で職をもち、すぐれた才能を世に活用せんと志す場合は今般も多くなると思うし、そのための大学開放は或る面でまだ不十分とは云え実現されつゝあるけれども、そうして大学に入学した女子の就職に対する真剣さにしても、男子一般の場合と比べて、どうしても異質のように思われるのである。まして放養のため、或はせいぜい卒業後のしばらくの家庭経済のための就学ならば、職につかねばならない。そのためには勉強しなければならぬのだと決意を固めている人たちとの間に、学習態度の違いが出てくるのは当然かもしれない。ことにそれは卒業後の就職及び在職に対する熱意にも現われる。そしてこのことが一部の真剣な、又有能な女性の社会進出のうえに影響することがありはしないかと懸念する。女子大学の目的とあり方については、私は別に見解をもっているが、他の機会に話し合つてみたいと思う。